

新世界

長野まゆみ



1st

新世界

1st

長野をゆめ

CYRILLUS RHEITA ZAGUT ARNOLD CASSINI CHACORNAC FIRMICUS GAUSS
HAHN LINNE PICARD BLANCANUS BAILLY GASSENDI KLAPROTH
PIAZZI SCHICKARD SCHEINER BIANCHINI ENKE HEDIN OLBERS MARIUS
SOUTH BURG MASKELYNE RITTER ROMER UKELT EULER PPYTHEAS HANSTEEN

しん せ かい
新世界

長野まゆみ
Mayumi Nagano

初版印刷／1996年 6 月15日

初版発行／1996年 6 月25日

発行者／清水勝

装 丁／泉沢光雄

装 画／長野まゆみ

発行所／河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 03(3404)1201

振替 00100-7-10802

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

©1996 by Mayumi Nagano. Printed in Japan. ISBN4-309-01072-5

新
世
界
1st

イオは夜間学級の帰りがけに港近くをぶらついていて、午前零時をまわり、あたりはすっかり闇に閉ざされている。視力に問題のある彼がうっとうしい黒の人工水晶なしに裸眼で歩けるのは、太陽のないこの時間にかぎられた。

授業の終わるのが午後十一時半、それから夜明けまでの数時間が、イオにとってはもつとも開放的な時刻だった。沙の海を疾る燈台監視船の燈が湾のかなたに明滅して遠ざかる。啼き沙のささやきとカグーの叫びとともにオシキヤットの夜は更けてゆく。

病院のほうから、寮母に連れられた子どもたちが列になって歩いてくる。どの子も、胴体と手脚をつなぐ歩行用具を軀に嵌めていた。それなくしては歩けない。ふ

だんは寝たきりで、食べることも、口を利くこともままならない。だから、こんな夜半に散歩をするのだ。

イオは路肩へ寄り、彼らが通り過ぎるのを待った。そろいの真つ白な服を着ている。ひとりの少年が、イオに近づいて手を握った。細く冷たい手だ。

「レト、いけませんよ。列に戻りなさい。」

寮母が少年を列へ戻し、彼らは十字路で方向を変えて、また病院の方角へ引き返してゆく。イオの手に、硬貨が一枚残った。電話専用の硬貨だ。十字路に紅い表示燈をともした通信所がある。イオはそこへはいり、少年がくれた専用硬貨で「R」電話をかけた。

番号はでたらめにまわす。上空に浮かぶ交換器の音声、オツナギデキマセンと伝えてくる。新世界への移住が流行し、市民は毎日減るいっぽうだ。街には無効になつた番号があふれていた。

イオはそのまま執着く受話器に耳をあて、ツー・ツーという音にまじって聞こえてくる、あのつぶやきを待った。今夜も、通話は混線している。

……キュリッロス、……レイタ、……ザグート、……ビュルク、……アルノルト、

……ソレンセン、……モレトス、……ビアンキニ、……オルバース、……ミンク、
……マラルデイ、……レーマー、……ウケルト、……ルビニエツキ、……セービト、
……、

新世界の定点観測所を呼び出す声が、いつまでもつづく。イオは途中で受話器をおき、通信所の外へでた。

配給票を換金する男たちが、場末の食糧品店の裏口にならんでいた。食糧よりも現金を手に入れたい連中だ。新世界への移民船に乗る搭乗券は高い。住民たちは、生活を切りつめて資金を貯えた。

十歳くらいの少年も列にまじっている。傍の男がしきりに口説いた。少年は、はじめ硬い表情で怯えていたが、そのうち顔を紅らめ、しまいには配給票を受けとつて男の云いなりになった。彼らは、路上だということをすっかり忘れてゐる。だが、この薄暗いチュンハの路地裏ではそんな光景は日常茶飯だ。

港町の暗い小径を照らすのは、吊り洋燈や、ところどころに置かれた水瓶の浮き蠟燭だけである。水路や門柱の脇の水盤にウォーターヒヤシンスといっしよに浮か

べた燈もあつた。イオは、片っ端から燈を消して歩いた。蠟燭のわずかな燈火さえも、彼の睛めには、たまらなく眩しい。

チュンハの路地裏は如何いかわしさに充ちていた。イオはめつたに近寄らない。今夜は模型作りに使う特殊なパテを買いに來た。だが、その舗みせへまっすぐ向かうつもりはない。そもそも、面倒なことがきらいなイオは、模型作りを思いついても、實際に取り組んだためしがなかった。

でたらめに歩いて、たまたまパテの舗に出喰わせば上出来だ。そんな偶然に恵まれたなら、模型作りをはじめてもよい。……何を造ろう。新世界の都市に自分の居場所を確保することからはじめようか。移住許可証さえ手に入ったら、彼のような睛を持つ者でも裸眼で暮らせるといふその街へ行つてみたい。

イオは街燈のある徑みちを避け、路地から路地へ暗がりを求めて歩いた。ときおり蠢うごめく固まりは人影である。

「燈は要らんかね、」

見知らぬ小男が、イオの行く手で通行人を攔つかまえ、強引に燈を売りつけている。巫人マジヤンだった。髪を切らない風習の彼らは、地面へ届くほど長く伸ばしている。小男

は、布で束ねた白髪^{しろが}まじりの髪を引きずり、路地を行きつ戻りつした。頭部と肩掛けに同じ布を使った服が、亜人^{アジヤン}の特徴だ。顔以外の部分は、たいてい布で隠されている。

イオは、燈など要らない。引き返そうとしたが、小男は客を見逃さなかった。髪をわざわざいわせながらイオの行く手へまわりこみ、燈を突きだして徑をふさいだ。浮き蠟燭よりもさらに弱い燈火だ。それでも、眩しいことに変わりはない。イオは睛^めをまろうとして腕をかざし、おぼろげなその燈をさえぎった。路地にはいたるところに小さな段差があり、イオは窪みに足をとられた。

「そら小^コ哥^{バン}、足もとが危ないですぜ。燈をお持ちなさい。」

小男は船員なまりを真似て、やにわにイオの腕をとった。手を貸すふりをして拇^{おや}指^{ゆび}を腋^{わき}下^げへねじこんでくるやり口が、小男の素性をあらわにしている。指は妙にやわらかい。棘^{きく}皮^{くひ}動物のかたちを思い浮かべた。その動きは執拗で、服を着ているのに裸にされたような気分だった。イオは腕を軀^{からだ}にひきつけ、男の指を避けた。

「要らないよ。」

「そう、仰いなさんな、」

腰をひくく保ちながらも、小男はあくまでも退かないというかまえた。背はイオよりひくい、隙はない。イオは、燈を買うまでは解放されないと悟って、空いたほうの手でポケットから硬貨を掴みだした。小銭で片づく面倒ならば、始末は早いほうがいい。

「いくら、」

「二千ロケールで。」

べらぼうな額だった。イオが買おうとしている特殊なパテよりもさらに高い。

「そんな大金はないよ。」

「ならば、お若い。《PRES》を試しちゃどうですかい。へへへ、紅瓊^{ルゼオ}だけでもいいですぜ。雛^{ひよ}っ子^このは躰^{てい}のほんの一部分でも、後で高く売れるもんでね。」

小男は急に野卑な笑みを浮かべた。紅瓊^{ルゼオ}というのは、この世界のよく知られた隠語だ。イオは思わず唇を手で蔽^{おお}った。

「お断りだ。そこをどけよ。」

突っぱねながら、途惑いもあった。自分が《PRES》を要求されるとは予想していなかった。《PRES》は、どいの波止場でもてっとりばやい稼^{かせ}ぎ口としてさかん

だが、商売になるのは綺麗な顔だちの少年だけだと思っていた。彼の学校でいえば、ミンクなどがそうだ。

ミンクの《PRES》は、よくでまわっている。安手のものは、露店でも手にはいる。樹脂や玻璃がらす、陶器などの素材によって質感も値打ちも異なった。樹脂のできればは精巧で、柔軟性に富み、リアルな感触を体験できるのだと、イオも知識だけじゃあった。学校生徒でさえ、ミンクの《PRES》をいつそり持ち歩いている者がいた。《PRES》には、じ丁寧フイヌに身体チップがついている。手持ちのCODAコードで、ありのままのミンクの姿を再現できた。蜂蜜ハチミツがあればなおさらいいと云われる。感触の刺激がいつそう増して、たったひとつの《PRES》で、欲望のかんりの部分を充たせた。

ミンクは、いろいろな意味で特別な少年だ。顔だちは、学校の中でも飛び抜けている。昼間部の生徒なのでイオは身近に接したことはないが、口を利いたり、人の話に耳を傾けたりできないことは、よく知られている。その点は、先ほどすれちがった病院の子どもたちと変わらない。

ただ、歩行用具カシユは必要なく、自宅で生活している。むろん、読み書きもできなか

った。見てくれのいい少年をそのかして《PRES》の商売をする者にとっては、さぞかし都合のいい生徒だろう。

「……小哥、二ロケールにしときましようか。」

小男は何喰わぬ顔で訂正し、なおも燈をおしつけた。イオは白銅貨を二枚手渡した。小男はイオの手に燈を持たせ、ようやく徑をゆずって姿を消した。何のことはない。その燈は、貝蛸が産卵に使う船の皿へ水を汲み、蠟燭を浮かべただけのものだ。船の皿は、この時期に波打ち際へ行けばいくらでも拾える。

オシキヤットの灣はどこまでもつづく沙の海だが、亜人たちは引き潮徑の在り処を知っている。そこを渡って、波打ち際までゆくのだ。

イオは、すぐに燈を捨てた。二ロケールあれば、旨い蜜菓子か汽水が買えた。それを思うと口惜しく、紅瓊ていどなら、《PRES》を承知すればよかったという気になった。それが後でどんな取引をされようが、かまうことはない。イオは、腹立ちまぎれに船の皿を踏みつぶした。すぐさまべつの亜人がやってきて、その残骸の中から何かを拾った。

「そんなもの、どうするんだ。」

イオは怪訝な顔で訊ねた。返事はない。腰の曲がった亜人は、巻きつけた布の間から目の部分だけをのぞかせている。顔をあげたさいに、イオと目が合った。眼球の混濁した亜人が多い中、珍しく榛色の澄んだ晴をしていた。虹彩は黄金色にからみあう火花を散らしている。燃えあがる閃光。だが、すぐに沈静して、晴の陰影にまぎれた。

「……え、」

イオは、一瞬何かを語りかけられたような気がした。亜人は、布のこすれあう音を残して立ち去った。粉々になった船の皿は、そのまま遺されている。ほかには何もない。いったい彼が何を拾って行ったのか、イオは無性に知りたくなった。

ぼんやり歩いていたイオは、後ろからつけてくる若い男に気づかなかった。舟形の水盤がある曲がり角で、いきなり背中を触られた。ここが、どんな界限かを承知でうろついていたが、不意を喰らって思わず身をすくめた。あまりに背筋がぞくぞくして、声はでなかった。

「……めずらしいな。今どき《本物》の龍骨ぢやないか。感触でわかるぜ。よほど金持ちなのかい、」

「だったら、こんな街に残ってやしないよ。とうの昔に新世界へ行ってるさ。」

イオは、軀をねじって男の手を避けた。だが、すかさず手頸を掴まれた。男はイオの尺骨の突起を指先で撫でている。

「たいしたもんだ。螺子^{グイス}まで《本物》か。五体満足のうちに行くこたないよ。向こうは、軀を動かすのも数倍楽らしいぜ。だから、じゃんじゃん子どもが増えるんだ。今ぢゃ、こっちよりも人口が多いんだからな。寿命も長いとき。」

皮肉な口調で、新世界を向こうと云う。男が手を離れたのちも、背中や手頸には指跡が残っている気がした。

「ぼくは、べつに五体満足ぢゃないよ。」

すぐさま、男の目つきが変わった。イオが軽率な発言だと気づいたときは、手遅れだった。こんな手合いは、人の厭^{いや}がることであれば、見抜くのも強^たいけるものも長けている。

「へえ、そうか。どこが悪いんだ、」

狡猾な口調で訊^きく。晴をそらせば疑われる。イオは逆に男を見据えた。わざと短くした船員服の上衣から、意外に細い胴^たがのぞいていた。無重力の航行は骨を蝕む

ものだ。船員は皆、骨をやられている。《人造》が常識だ。イオは男の軀をじろじろ眺めた。骨格はすべてが人造めいていた。触りたい衝動に駆られ、イオはあわてて手をポケットへ突っこんだ。

「あんたの龍骨はまだ《本物》なの、」

「触ってみな、」

男は、いきなりイオを抱き寄せた。向かい合わせに、ふたつの軀が密着した。イオの顔は男の胸のあたりだ。船員服の衿に航海士をあらわす錨の標がついていた。男はイオの頸椎に触れてくる。イオは抗おうとしたが、軀はまるで云うことをきかない。彼の意志に反して従順だ。

「ほら、背中へ手をまわせよ、」

イオは命じられるまま、おずおずと男の背へ手をのばした。男には温もりがあり、イオは自分の手の冷たさを感じた。《人造》といったって、施術後の皮膚には傷痕も何も残らない。《本物》とのちがいは、そこから発するかすかなパルスを指先に感じることだ。製造元の ICE Inc. はいつも、自分の商品がどこにあるかを把握している。

……キュリツロス、……レイタ、……ザグート、……ビュルク、……アルノルト、……ソレンセン、……モレトス、……ビアンキニ、……オルバース、……ミンク、……マラルデイ、……レーマー、……ウケルト、……ルビニエツキ、……セービト、パルスも混線して、〃R〃電話の音声が混じった。定点観測所を呼びだす声。

男もイオの背中を撫でた。互いの同じ骨に指を這わせてゆく。

「龍尾テイルは残ってるんだね。これも売っちゃまうの、」

「いずれはな。若いのが、おまえこそ龍骨キールを売らないかい。いい金になるよ。それとも、いきなりTが怖いなら、手はじめてPはどうだ。紅瓊ルビオだけでも。この先も取引してくれるなら、うんと高く買ってやるぜ、」

口調はおだやかだが、態度は荒々しい。男はイオを正面へ向けて二の腕を掴まえた。こんどは容赦がない。力づくで振よじった。ふりきって逃げようとしたイオは、瞳孔に閃光を浴び、怯ひるんだところを押さえこまれた。男は口に発光体をくわえている。口に含んでいたのか、体内から出したのかはわからない。イオは瞼まぶたを閉じるのが精一杯だった。

「おまえ、新世界へ行きたいんじゃないのかい。はじめは、紅瓊ルビオだけでいい。軽い